

アラン

人間さまさま

高村 昌憲 訳

一 技術について

私は、行為そのものを訓練し、継続した試行と模索によって学ぶこの種の思想を技術と呼びます。ご存知の様に、人間そのものは多くのメカニズムを利用し、接触し、あらゆる方法であらゆる条件でも実践するお蔭で、大変に無知でありながらも最後には確実な方法を知る様になります。そして先ず科学を手にする者とは、全く別な風に知ります。更に、この両者の間の大きな相違は、技術者は重要なものと偶然のものを決して区別しないことです。彼には全てが平等です。そして数えるものは成功しかありません。従って彼は農学者を嘲笑するかも知れません。何故、化学肥料とか新しい輪作とかより一層深く耕作しても期待した通りにならないのか、その理由を農民は知りませんし、少なくともその理由に気付くこともありません。長い実践によって単に彼は、決して分かりませんが、それでも考慮に入れた僅かな違いに従って全ての耕作作業を取り決めます。そして、それは農学者には気付くことさえ無いかも知れません。この技術的な思想の本来の意味とは、どんなものでしょうか。それは熟考によって探求することではなく、両手で試みることなのです。電話機を動かす電話交換手の最初の動きは、技術者の動きです。そして、何よりも有効な動かし方がありますので、自然とその方法に落ち着きます。その思想の主要な努力は、ここでは何も忘れることなく、状況や行動と同時に成功を認めることです。私は、非常に記憶力の優れていて、ほぼ逸話的に難なく思い出す職業の人々を観察したことがありました。しかしながら、技術的には二種類に区分することが出来る様に思います。というのも機械において起こる様に、損失も無く試みて直ぐに結果が認められる技術があるからです。それとは反対に農業の実践においては試行が高く付いて、結果が出るまでは長く待たされます。両者の間に私は医者を入れたいと思います。医者の試行は何時も暗中模索であり慎重ですが、医者は殆ど何時も大きな危険も無く試行することが出来ます。この三者の間で最も反省が少ない技術者は、機械技師であるのは明白です。彼は障害が起こる度に、謂わば方法の点検を行い、素早く試行しますが、屢々観察した前でさえも行います。医者は先ず観察します。農民にあつては寧ろ、何時も試練に耐えた行動規則に従うための仕事を実践することに立ち戻ります。力学や物理学や化学に見る様に、結果によって直ぐに立て直されるこの技術は、直接的技術と呼べるかも知れません。その時は両手で思考されるのであつて、何千回もの試行が最も明敏な観察に導くことから大変に遠くなります。

しかし、純粋な技術を判断しなければなりませんし、その技術を約束するのは如何なる種類の精神であるのかを言わなければなりません。ところで、熟練した技術が獲得されても、その迅速さを保存するものが何も無いのは明白です。行動が先行します。しかし精神は結果に基づいて働くだけです。両手は慎重ですが、精神は決して慎重ではなく、事物によって常に立ち直るのを確

信させられます。「良く見て下さい」、これは機械技師や熟練の化学者の言葉です。私が指摘したいのは、最初の試行で観想的な〈数学〉が〈計算〉を用いることで確かに技術的になりますが、それだけ益々問題はもっと複雑になります。試行するのに長けているライブニッツとかオイラーに見る如く、発見においてさえも私は技術のことを言います。そして、本当に彼らは他の連中が適さないメカニズムを動かすに至る時に、書くための方法を変えているのです。数学者の精神はこの種の幾つもの考察によって大変に良く説明しています。〈数学者〉とは思想家であると言われるよりも寧ろ労働者であると言われるかも知れません。数学とか化学のどんな技術者においても、行動を要求し、対象が応える前には決して思考する術を知らないこの短気が何時も再び見出されます。そして自然の結果として、精神の空虚さは観察が常に方法に立ち戻らせるものの結果でありながら、それは真贋の概念でさえも消して仕舞います。技術者は、試行した前までは懐疑論者です。しかし注目しなければならないことは、試行した後にも又彼はより一層懐疑論者になりますし、又長く成功が続いた後でも更に一層懐疑論者です。決して一つの観念も見出さないのです。観念を形にしなければならないのです。（完）

二 バルタザール・クラエ

バルザックは、バルタザール・クラエ(1)によって技術活動を良く書きました。バルザックは観念に拘らず、しかし絶対に間違えない才能によって情熱的な化学者の真実の特色を纏めました。これらの変化と一つの外観から他の外観への移行が繰返される様子は、大変容易に生まれま
すし、更に想像もつきませんが、奇跡と想像上の狂気と子供じみた期待が齎されます。この時は他の身体ではなくて一つの身体が大変良く想像されます。この種の学問は精神を継続した自由意志に慣らします。このやり方で人が見れば見る程、可能性に限界を設けることはありませんでした。というのも全ての結び付きが、全ての可能な状況の中で試行され得なかったからです。それ故に、魔術書や伝統が事実上の力を手に入れます。大地から生まれる砂と、アルミニウムから生まれるガラスを見た者は、最早想像するのを我慢出来ません。そして、事物が最早視線の下になくなるや否や、そうすれば謂わば熟考は何でも構わないものを、何でも構わないものに結びつけるのに忙殺されます。そこから精神の欠如は狂気の沙汰に関係して来て、この小説家は階段でのバルタザールの歩き振りによって、忘れられない特色を描写しました。

以上は常に精神の無駄な働きによって、試しに戻された発明者の小説です。従って、お金持ちになることを求めないで下さい。同様に、遊び好きな人になることも求めないで下さい。彼らが自らに与えるのは口実だけです。バルタザールの遊びとは、結合された経験の中で自分の思想を探すことです。それで、この煩わしい手を阻止するのは如何なる科学なのでしょうか。如何なる科学が、この変えるための力に前もって限界を設けるのでしょうか。エンジンの火花点火機関の完成を私たちが眼にしたのは、三年のテストを経てからでしたが、それを企てたのはシリンダーと接続棒を前にして発見した全く無学の一労働者でした。それはまるで硫黄と水銀を前にしたバルタザールの様ですし、火への思いがけない喜びを前にしたパリシー(2)の様でした。動揺は、欲望以外には何の理由も無く、百回のテストを行うこの種の忍耐を与えるだけです。そして大変容易に満足する行動の欲求は、常に予感の様なものです。経験を理解する術を知る日まで経験を延期するためには、恐らくデカルトの精神の力が必要です。しかし、現代の検査係たちは熱狂者たちの様なもので、彼らは解く鍵でもない鍵をもう一度試みませんし、あるいは既に探し回った抽出しの中をもう一度探しません。新しい物が毎回発見される抽出しを想像して下さい。それ故に単に探し始めたとしても、誰がそれを止めるのでしょうか。盲目の経験とはその様なものです。

賭けをする人は、勝つ可能性があるという観念だけによって、運を試してみることに決して飽きません。かくして偶然がついに化学者の精神を忙殺します。そして可能性に近づいたり、所謂人間としての道を与えることしかないので、その様な賭けをする人が何時か休息を取って、その様に幾つもの好機を進んで断つことは不可能です。技術的な興奮は食事も忘れることになります。未だ試みていない術策の観念に、実際に如何にして抵抗するのでしょうか。精神は経験に対して救いようがないので如何に抵抗するのでしょうか。その時は行わずして熟考することに最早我

慢出来ないのです。

愚かなルミュルキニエは、この物語の中でバルタザール自身のイメージとして描かれていますが、今後は経験に従う無意味な科学は無いのです。召使いには経験しかありません。そして、何ものも彼から経験を取り除けません。結局のところ奇跡は、その理由を知ることもなく、閉じられた実験室の中で起きます。そして、そのこと自体は深刻でもあります。何故なら、それはデカルトの試行から逸脱させるものであるからです。それは余り弱い期待ではないでしょうし、その反対に余りに強い期待です。トランプに勝つのと全く同じ様に、訳も分からず成功することには心配しなければなりません。（完）

(1) バルタザール・クラエは、バルザックの小説『「絶対」の探求』（一八三四）の主人公。

(2) パリシー（一五一〇頃～八九又は九〇）は陶芸家で、田舎風陶器という独自の技法を完成した。

三 実用主義

〈実用主義（プラグマティズム）〉というこの無情な名称は、少なくとも技術者精神を意味しています。その精神は行動しか考えず、結果しか証拠として受入れないのを制度と見做します。実験室は神格化されていました。しかし、これは機械が語るのを要求する技術者たちの圧制による結果でしかありません。そして、この世にあるに違いない最も力強い最高の機械を驚嘆することは、殆ど儀礼的な義務です。しかし、この驚嘆からは何も導きません。精神は愚か者の如くその前に残っています。理性的な動きだけがその時、自分自身で機械を動かすこととなります。そして楽しみそのものは直ぐにすり減ります。というのも、精神にとっては何の糧も見付からないからです。この落着きの無い退屈が戦争の原因の一つにもなります。もっと正確に言うと、もっと強力な機械を建造する必要性によるのです。取分けその機械を試す熱狂によるのです。この精神は身の破滅を招きます。

もしも何らかの望むべき文明や文化があるとするなら、それらを探すべきものはそこでは決してありません。あらゆる見地から〈人間性〉がそこでは不足しています。何故なら一方で〈人間性〉は、最初に沈思する精神の働きを前提としていますし、触れたり変えたりすることを自ら禁じているからです。この規律を外して尊敬の念を抱く時は決してありません。試みることは大変に容易です。そして試行すれば別のものを導きます。大変な熟練になるとその動きは何時も荒々しくなって苛立ちます。横暴な動きになります。そして、もしも技術的な活動がずっと前から精神的な活動に先行しているものである性格そのものによって明確にしたいなら、実物教育を疑わしく思うのが真の理性です。子供たちは、対象が責め苦になり始めて答える様に要求される経験の中で、それらの経験に代わって示される意欲を持ちます。子供は事物を砕き、思考すること無く発明する熱狂によって動物たちを苦しめます。成長活動に大変深く結び付いた力の濫用に応えるのは、生体解剖者たちの冷淡なこの残酷さです。彼らは真の答えを得るために、抑制し沈思し熟考するに十分な時、何百匹もの動物を生け贄にします。内科医と比較して外科医は、更に両手でしか問題を解決する術を知らない怒り易い人々の一人です。この方法はあらゆるものの中で最も自然であり、真っ先に行う方法です。そこで、戦争になると直ぐにあらゆる方法で参戦します。従って産業の活動、取分け作り分離し結合するもので最も卑小なものに戦争があります。何故なら、麻の繊維とか縦の木の板の様に元の儘の材質を利用しているものに代わって何時も観想的で停止した一瞬がありますし、それは美しくもあるからです。しかし鉄の支配はあらゆる職業に広がっており、紙を作る産業は先ず樹木を煮てどろどろに変えます。その様にして私たちの全ての悪は、技術の錯乱と呼ぶべきものの厳しい法則に従ってお互いに関連して繋がっています。

〈人間性〉は従って、別の意味では性急な探求の中にも更に欠けています。何故なら、歴史的な精神が欠けているからです。技術においては重要である最新の道具しかありません。刃がついた木製の旧式の犁は嘲笑されます。産業博物館は軽蔑を教えるためにあるだけです。それと反対に

今でも貢献しているユークリッドの幾何学やヒッパルコス (1) の天文学への尊敬を考えましょう。それらは観想的ですが、一方は自発的な規律によるものであり、他方では私たちの手が届かないのが極めて明白な天体を変えようとする意志を絶対的に私たちから引き離す必然性によるものです。それらはその時に〈大人〉と認められる思想になります。そして、その人はやがて侮辱される人々よりも、早く事に当たる様に主張します。その代わりにトーチの炎で鉄の棒を切らずに、ノコギリで切る労働者は嘲笑されます。しかしこの観念を辿って行くと、所謂文学的な〈教養〉の価値に気付かされます。それは偉大な作品の中に、どんな人でも大変良く発見するものです。それ故に、これらの研究は〈人文学〉と良く呼ばれます。しかし又、非人間的な歴史もあります。それは際限無く細部に拘って、最も優れた典型を軽蔑します。その点では最新の結果で最も秘められたものの一つで技術的な活動も認めなければなりません。というのも古文書の研究者はホメロスを読む人を嘲笑するからです。周知のことではないでしょうか。この思想は従って行動を見守ります。歴史家は書物を読み、分析し、分類し、カードに従って記録を分解し、未だ行われていなかった何らかの研究を堂々と提出します。別のことを見出すのを十分に確信している他の技術者は、それを笑います。チベットでは不十分な別のことです。勿論、歴史家は何らかのものを確かに忘れるか無視するでしょう。しかし何らかのものは、それが発見される時、最も重要なものになるでしょう。ここでは既に、最初に行くのは行動です。そして思想が続きます。その様にして歴史的な観念は、歴史的な技術によって滅びます。そして、この技術的な錯乱状態は我が国フランスよりもドイツにおいて顕著です。何故ならドイツは産業国であるからです。結局のところ、真の教養を助けるのは何時も大変に観想的な農民の精神です。ヘシオドス (2) の詩以後では、ウエルギリウス (3) の『農耕詩』が大変力強い象徴になっています。(完)

(1) ヒッパルコス (前二世紀) は、ギリシアの天文学者で、春分や秋分を発見し最初の天体図を作成した。

(2) ヘシオドス (前八世紀頃) は、古代ギリシア三大詩人の一人で、『労働と日々』を著した。

(3) ウエルギリウス (前七〇～前一九) は、古代ローマの詩人で、ローマの健国を歌った長編叙事詩『アエネイス』の他に『農耕詩』『牧歌集』の作者である。

四 スコラ学について

知識の推敲と完成という両者の間に言葉を認めるのを目的と見做すものを、スコラ学と呼ばなければなりません。私たちの判断を立て直し得る経験の中に決して対象が無い時、スコラ学の方法が唯一のものであります。しかし対象が待っていて答えることが出来る時でさえも、スコラ学の方法は未だ最初のものであります。何故なら最も近い世界は、常に人間の世界であるからです。そして人間たちとの和合が、どんな思想家にとっても最初に急を要するものであるからです。どんな観念も先ずスコラ学であるということさえ出来ます。というのも、スコラ学とは逆に、事物との和合を求める技術は自然に無言になり、模倣と修行によって伝えられるからです。彼らはスコラ学の豊かな蓄積のお陰で、それを行える時でさえも技術者たちは進んで議論しません。話すことは彼らの作品になるのです。

どんな観念においても一致が第一です。そして分裂は一致に関連しています。もしも最初に観念の獲得が、言葉による最初の試行と同時に行われると考えるなら、それは明白なことです。議論に引き渡される歴史の始まりから離れて、どんな子供も長い年数の間、子供を教える者たちと一緒に思考するのです。そしてどんな勉強も彼らと一致することにあると私は言うだけです。私たちは、その言葉が示している様にスコラ学的に教育されます。そして自然の対象だけがその時、言われていたことと今言われていることとの間の外見上の矛盾から生じます。それ故に作家に先ず要求されることは、作家が言ったことを否定しないことです。何故なら、もしも作家が自分で言ったことを否定していると私が思うとすると、それは私が作家に反対すること無しに作家と一致出来なかった様になるのと同じであるからです。例えば、もしも星々が回っていると言っていたとしても今では地球が回っているということであったり、あるいはもしもこの毛糸の包みは鉛が毛糸よりも重いので、鉛とかその鑄塊よりも重いと言うとするなら、実際に重要なことは使用する言葉をより良く理解することになるからです。そして、もしも所有権が不公平であるとか、神は神が愛する者たちを苦しめると言うとするなら、一致はまさにより一層困難になります。

しかし結局のところ問題がどんなものであろうと、議論というものは疑いが無い一致に高めて討論を和解させるに至るために、当初のものに極めて類似したもう一つの一致へ行くことです。プラトンは、事実に至るのを慣習とする人々を先ず驚かさず忍耐で、公平に振舞います。しかしながら、公平とか不公平である方が良いとしても、どの様に決めるのでしょうか。その点について思い切って言わなければなりません。私たちは経験が真実や虚偽によって決まることを余りに信じる気になっています。有名なフーコーの振り子は、地球が自転していることを意味しています。そして、もしもこの振り子が砂の上の本来の道を横切るのを私が見るとすれば、地球が自転しているのを私は見ている様に思います。しかし不動のものと想定されていた地球の周りを回るものが、引力とか摩擦とかその他のものによってフーコーの振り子を導くのである、と言わせないのは誰でしょうか。そして著名なポワンカレが言った様に、もしも天文学上の或る三角形が二直角と異なる内角の和を示すならば、一方はユークリッド幾何学を放棄すること、もう一方は

光学を変えることの両者の間で、更に選択が行われるに違いありません。従って数々の微妙な解釈によって全ての新しい事実を原則に戻すための神学上の規定を、そんなにも馬鹿にしてはなりません。或る種の未開人たちは祈りによる呪術が雨乞いになると考えますが、雨が降らなくても祈りが足りなかったのだと言うのを憚らないのを私たちは本で読みます。このことは私たちには関係の無いもので、殆ど笑うべきものとして示されます。しかし、それを笑う人を私は笑いません。この精神の動きは、要約した私たちのスコラ学なのです。そして私たちのスコラ学とは私たちの思想です。或る人は聖書が全てに足ることを望みます。私としては、プラトンが全てに足るといふ観念と共にプラトンを読みます。そして私は、どんな人も私の言葉を話しているのを聞きますし、彼は真実を言う、彼は正しいという観念と共に聞きます。何にしろ聞くこととは、何のことになるのでしょうか。読むこととは、何のことになるのでしょうか。全ての観念の母であるこの観念のことを話しながら、私は外見上の困難に打ち勝つことに専念します。思考することとは、第一にはこのことです。これらの観念を持っているなら、事物の学習がそれらの観念を立て直しますが、決して与えることはありません。(完)

五 観念の獲得

全ての観念が経験によって取得されますが、確立するためには役に立ちません。それが本にしない時には、対象を持たない思想は決してありません。そして本は、取分け古くて有名な本は取るに足りないものではありません。しかし、この例には二つの経験があることを理解させてくれます。事物を認識することは経験になります。人間のしるしを認識することも、経験になります。そして、幻影や迷信や偏見の様に、人間のしるしから生じて他の経験に変形させる誤りには枚挙に遑がありません。しかし、外部の世界に関して最も堅固な認識が人間のしるしと一致して大変に明らかにされることも又、注目しなければなりません。全く単独での自らの食の現象や、人間の生活における幾つもの食の現象でさえも、何であるかを知るのは不可能です。そして、もしもヒッパルコス(1)が貴重な天体図を残さなかったなら、アルクトウルス(2)が大熊座から遠ざかっていることを私たちは知らないでいるに違いありません。従って私たちは決して一つだけの観念を形づくっているのではないと言えるでしょうが、常に私たちは人間の観念に従うのであり、そして立て直しています。私たちはそれ故に、しるしで武装された事物へ赴きます。そして魔法の古い呪文が、この動きの素朴な思い出を守っています。というのも私たちが人間のしるしによって外見に打ち勝たなければならないのは、何処までも本当であるからです。これは従って取るに足りないことではなく、経験のためには良いしるしを知ることであると私は言います。気紛れな火の前で、一人が死者たちの魂であると言うと、もう一人は硫化した水素であると言います。夢を思い出して、一人は神々の伝言であると言うと、もう一人は人間の身体の活動に従った不完全な知覚であると言います。事物へ全く独りで赴き、如何なるしるしも知らず、それを試行することもなく自然の人間はどうかというと、それは空想的な人間であって、決して誕生しませんでした。

実際の人間は女性から生まれました。単純な真実であり、偉大な結果ですが、大変に注意深く考察されたことは一度もありません。どんな人間も最初は人間の布地に包まれますし、その直ぐ後には人間の腕に包み込まれました。この経験に先行する経験は決してありません。彼の最初の世界とはこの様なもので、事物の世界ではなく、人間の世界であり、しるしの世界です。そこに弱々しい生活が依存します。それ故に一人の人間が如何に観念を形づくるのかを決して尋ねないで下さい。彼は数々のしるしと共に観念を受入れます。そして彼の思想の最初の目覚めは、確かに疑いも無くしるしを理解するためです。事物が示されないで先ず人々が示される子供は、何という子供でしょう。右と左、週や月や年だけを教わった人は何処にいますでしょうか。私は、時間の最初の観念が孤独な反省によって如何にして形成し得たのかを求めながら進むこれらの哲学者たちに大変同情します。決して生まれることのなかった人間によって、最初の人間の観念を知ることが好奇心がそそりませんか。それは上手い具合に発育を見ます。しかし、その始まりはそうではありません。そして、まさしく私はここで発育に関する重要な概念を手に入れます。確かにどんな人も事物を知る前に、しるしを知りました。もっと言いましょう。しるしを理解する前

に使ったのだと言いましよう。子供は、先ず明示したいと思う前に泣いたり叫んだりします。しかし直ぐに母親が理解します。そして子供がママンと言うと、それは唇から出る最も容易な最初の音でしかありません。子供は結果によってしか言うことを理解しません。つまりそれは母親が直ぐに送り返す行動やしるしによるものです。慧眼なアリストテレスは「子供は全ての人間を先ずパパと呼ぶ」と言いました。子供がこの観念に到達するのは、しるしを試行しているからです。そして理解する前に、まさに理解されます。それはつまり子供は思考する前に話し出すということです。

しるしの最初の意味に気付いて下さい。それは他のものの上に生まれる結果です。子供は従って、専ら機械的な記憶による人間のテキストを第一に知ります。その次にそこから自分と似た顔に、その意味を見抜きます。一つのしるしは他のしるしによって説明されます。そして今度は、他のしるしが人間の顔によって送り返された自分自身のしるしを受取ります。誰もがそれ故に他者から教わります。そこに美しい友情があります。自分の子供を理解しようとしたり、子供が理解していることを行おうとしたりする母親、そして学ぶことを子供に教えている母親の配慮とは、何という配慮でしょう。全てで集められ、更に関係もあります。思想というものはそれ故に複数のものの中にありますし、交換の対象でもあります。思考することを学ぶことは、従って意見を同じにするのを学ぶことです。良く思考するのを学ぶことは、最も優れた人々と最良のしるしによって一致することです。疑いも無くそれらのしるしを吟味することです。そこには書物の部分もあります。しかし、人間の意味としてのしるしを先ず知ることであり、そこに秩序があります。事物の学習は常に時期尚早です。読むこと、書くこと、暗誦することであるしるしの学習の方がまさに緊急にやることです。何故なら、もしも私たちが少しずつ真実の方へ引っ張るのは、私たちの最初の間違った観念でないとするなら、私たちが思考するのは無駄になるからです。まるで最良の技術のためである様なことが起こります。精神というものが機械の中にあつて、私たちは愚かな儘でいることとなります。（完）

(1) ヒッパルコス（前二世紀）は、ギリシアの天文学者で春分・秋分を発見し、最初の天体図を作成した。

(2) アルクトゥルスは、牛飼座のアルファ星。

六 一般的観念

私は、議論する人にしか興味の無い問題に一分間も割きたくありません。しかし人々が言う様に、一般的観念に高められる時、多くの真実を獲得したと信じる人々がいますし、私には知り合いもおります。ところが、彼らがそこから探求しに行くことを私は少しも理解しませんでした。何故なら知らなければならないのは、精一杯に各事柄に関して確かに真実ですと言うことであるからです。従って、精神の自然の活動は観念から事実へ、そして種族から個人へ降りることである様に私には思えます。その上で私が容易に気付いたのは、判断による殆ど全ての誤りが、その対象とその他の対象にとって共通した観念に従って起こる一定の対象を思考することに存するという事です。恰も全てのイギリス人が退屈していて、全ての女性が愚かであるかの如くです。そして結局のところ、最先端の科学における理論家たちは、各事物の特殊な本質に近づくのに最も有能な人々でもある様に私には思えました。その様にしてケルビン卿は海底電線の専ら電氣的混乱を、変化に富んだ流れに関して専ら代数理論に従って説明しました。そのことは全てが、特殊な場合も個人個人も思想を生み出さず、寧ろ思想によって支配されますが、完全でもないことを私には理解する助けになりました。子供や無知な者たちが特殊な事物の認識に帰されると、大変な誤りを語ります。何故なら彼らははっきりとした誤った知覚しか持たず、それらの相違も良く見ないからです。いずれにせよ、私が観察のために或るものに近づく時は、先ず大雑把に見ます。そして、他の多くのものと一緒に容易に混ぜます。私は動物と人間と馬と鳥を見ます。まさに私は屢々、先ず一つの言葉の次にもう一つの言葉を使いながら一つの観念を試行し、次にもう一つの観念を試行します。これは一般的観念の方法によって大変正確に思考することでもありますが、常に特殊な知覚を求めているのです。同様に昔の天文学者たちは、星々が円を描いていると仮定した時に、先ずその法則を考えました。つまり、もっと複雑な曲線で、これに倣って実際の軌道に近づきますが、それは更にもっと複雑です。

これらの考察は、観念の獲得に関係している前章の命題の続きを意図する読者を安心させるためでもあります。というのも殆ど読まれない巨匠たちの裡ではなく書齋の哲学者たちの裡に、至る所で読んだ概念を、読者は完全にひっくり返す様になるからです。観念の獲得のあらゆる抽象的な輪郭はざっと次のとおりです。最初のしるしが理解されると、部分的な区別も相違もなく全体を自然と示します。そして、最初の観念はこの最初のしるしに結び付き、心とか人物の様に極めて単純で一般的な観念に応えます。認識における最初の進歩は、人物における二つの側面に気付いて示すことにあります。その一つは、例えばママンであり、もう一つはパパです。又は、まさにレレでありロロです。私が子供のこれら二つの言葉を引用するのは、ノルマンディー人の子供は水のことをロロのミルクと呼び、その代わりにブルターニュ人の子供はミルクのことをレレの水と呼ぶからです。そして、これら二つの事例は、一つの言葉がどんなに沢山の事物に使われるのかを良く分からせてくれますし、そのことは常に極めて一般的な観念が少数であることから、特殊な観念が多くなればなる程それだけ特殊なものも多くなるまでになるという結果になり

ます。言語学者たちはその点についての変化を再発見しますが、常に見分けられる語根に従って、沢山の異なる言葉の中から証明しなければならないでしょう。それは同一の言語が、最も顕著な類似に従って、先ず多くの事例を明示していたことを十分に示しています。いずれにせよ、最も後れた野蛮な人種が、似ているのが非常に僅かなものに同一の名称を簡単に与えている点で、全てにおいて再発見される習慣から旅行者たちをびっくりさせるのです。その上、変身という昔からの遊びは、それと同じことを考える傾向を大変良く表しています。それは精神の子供らしい傾向で、常に言葉によって一貫しているものです。そして恐らく、隠喩も同じことを証明するに違いありません。しかし、ここで止めましょう。変身のこの問題は、余りに簡単な観察の後で直ぐに高度な困難を与えます。（完）

七 普遍的観念

一つの観念が複数の対象に適している時、一般的と言われます。しかし、一つの観念が普遍的であると言われる時は、全ての対象に適しているのを意味することは全くありません。何故なら、この場合においてあるかも知れないのは、〈可能性〉とか〈心〉の観念しかありません。そしてそれらはまさに抽象的で空虚なものであるからです。更に〈空間〉や〈時間〉や〈理由〉の観念にとっては勿論、関係がありますが、それらが何かの対象に属しているとは決して言えません。もっと適切に言うと、それらの観念は必然です。つまり思想というものはそれらを形づくるものであり、恣意的に変えることが出来るものではありません。それでも全ての精神に共通している観念がありますので、これらの観念は〈普遍的〉と言われなければなりません。そして共通した習慣に戻ることにしか行われないうでしょう。何故なら、もしも何らかの事物が一般的に許されるということであるなら、経験は殆ど似た様な場合に倣って大部分の人々をそこに導くことを意味しているからです。その代わりに、もしも何らかの事物が普遍的に許されるということであるなら、そのことは問題を理解するどんな精神にとっても明瞭で否定出来ないものであることを人は表したいと思います。

それ故に観念は普遍的であるよりも、極めて一般的であるという理由は決して無いと言いましよう。眼に見える全てのものの中に隠されている、眼に見えない力とかそれと同じ何かを示す〈ママ〉という未開の観念は、観念が存在し得るのと同じ様に一般的です。しかし批判は普遍として未だそれを受入れていませんでした。私たちは批判を理解するのに保証された道には気付いていないと理解しましょう。しかし、全ての対象に適していない〈円〉の観念は、その反対に全ての精神に適しています。この的確な観念を形づくるのを、何でも構わずに考えながら齎すための道は、幾つかあると理解して下さい。その観念はそれ故に普遍的と言わなければなりません。技術者たちは、大抵の場合は観念を一般的と見做します。それらの観念を理解しない人々にとっても正しいのは、その時の型に嵌まった行動です。例えば〈生命表〉が、全然確証され得ない人によって利用されることもあり得ます。対数表も同じです。しかし、その様にされて獲得された観念が、最早適確に話すための観念でないのも明白です。その様な場合には真実の観念とは証明出来る理論です。きちんと準備された精神にはどんなものでも自ら課しているものです。それは理論が観念であるからというのでは決してなく、まさに理論は普遍的であるからです。人間の経験においては円の対象しかないかも知れない時、円と円周率のパイの数字もやはり普遍的な観念です。そしてその上で厳密に語るとすると、円の対象は決して無いのです。円は他のものとの間にある一つの方法であり、実際の形に近づいて益々良く測定されるのが許されるものです。何故なら、観念も利用や便利さのためであることを除けば、恐らく実際には一般的でなく、どんな観念も常に普遍的であるとして思考されると言えるに違いありません。そして、もしもこの方法の最初の部分が自由に議論されるなら、二番目の部分では議論を受入れません。私が考えても、私の思考が何か曖昧で名状し難いものである限り、私は精神というもののために思考します。

そして、どんな形でもない精神の概念は不確定の何らかのものを持っているので、どんな思想も人間の精神のために思考されることを慎重に、そして安心して言いましょう。かくして不公平に扱われていると思っている人は孤独の裡で公平などんな人にも呼びかけますが、もしもそれらの取巻きの人々が彼の判断に一致しなかったなら、彼を理解出来ないからであり理解したくもないのを確信します。そして以上が民衆の証拠の中に隠れている観念であり、〈普遍的な同意〉を常に引合いに出されて、常に意見を求められます。恐らく、全ての人々が理解する如何なる問題も存在しません。四則の最初の数字についての単純な働きに関するものさえも存在しません。というのも、相談することが出来ない人々を別にしても、狂人たちも愚者たちもいるからです。だが、今の人々や未来の人々の集団全体にとっては、どの様な思想でも構わずに形づくるのを、それは妨げるものではありません。そして証明が注意深くて十分に準備されている人々の処への入口を見付けるのに応じて、観念は人間的なものになります。申し分の無い様に思考するために何世紀もの過去の中で、最も偉大な精神の人々との一致において見出されるのはどの様な支えであるのか、それはそこから既にお分かりになることです。そしていずれにしても、この一致は成熟しなければなりません。あるいは成熟するための何らかの方法を求めるとか見付けなければなりません。何故なら、それに反駁することは自らを反駁することになるからです。この道理によって、私たちから最も縁遠い作家たちの子供の様であると同時に力強い表現は、結局のところ一般的な善の部分を作っているものと認められなければなりませんし、それが普通の精神であると理解して下さい。もしもプラトンが非常識なことを言ったり、ホメロスが言ったり、〈模倣〉であったなら、最早人間の精神はありません。数々の相違点や隠喩や神話を打ち破り、最後には明らかになる術を知らなかった者は、少しも思考する術を知らないのです。文学的〈教養〉はそれ故に、信じられない位に非常に遠くまで前途が開けるのです。（完）

八 言葉

事物しか知らない人は、観念の無い人間です。観念を自ら見出すことは言葉遣いにおいてです。それ故に二人の子供の印象から比較し始めることが出来たなら、一人は決して事物にしか注意しませんし、もう一人は決して言葉にしか注意しません。後者はあらゆる点で、他の子供から遙か遠くへ超えているのがお分かりになるでしょう。何故なら習慣になった経験を記憶に止めることや、使用する言葉において意味する言葉の一つ一つを結びつけることは困難ではないからです。そして職業はその点に関して、どんな人でもびっくりする完全さを導きます。しかし最も重要である観念や感情にとって、職業人は常に子供でしかありません。その反対に、実際の言葉の研究においては、各人が体系化された全ての人間の観念と、あらゆる経験の上に光を発見します。それらは直ぐに、限り無い進歩を生ませます。何故なら一方で彼は、既に獲得されたもの全てを要約して受け取って和やかになるからで、他方で彼は、様々な年齢の言葉を追って動物性と想像力が常に力強く占めている、思考する性質に適している推進力をこの動きの中に発見するからです。対象の中の性質であるアンペアやボルトやオームに従って発明される完全な言葉と、人間の性質つまり自らに問うどんな人も出会う実際の困難にもっと多く考慮する俗語との間には、この関係に基づく多くの相違があります。そして、技術的な言語においてさえも、まさしくより一層声高に引用される者たちの様に、先駆者のいない言葉が見付かるのは稀有であることに注意しましょう。数学的な意味で獲得された〈関数〉という言葉は、政治的な部類のものとしても切り離せません。〈方程式〉と〈積分〉と〈収束〉と〈極限〉は、技術者の努力にも拘わらず、既に人間の言葉です。技術者はここでは定義の結果となる意味と、別の意味になるものは全て私たちに忘れさせたいと思っているのです。そしてこの技術は、どんな技術も同じ様に観念を消す傾向があるのです。旅行や商売や産業によって現代語を学ぶ度に、人は技術的に学びます。つまり曖昧でない対象を、単に指し示すことを目指して学びます。そして単語を発音しながら対象を示す余りに有名な直接的な方法は、〈教養〉から私たちに全く解放するのを目的と見做していたり、結果と見做していたりすると思われれます。

かくして全く型に嵌まって言葉を学ぶのでしようが、決して過去のことではないのです。しかし、その様にして実際の言葉を学ぶことが全てではありません。数々の単語を理解しなければならないのは、その時の単語のためでもあるのです。ここで精神は思考する様に強く命令されます。現代語に対して死語の決定的な利点は、誰も対象を私たちに示すことが出来ないことです。その時は語根や相関によってその意味を学びます。そして最も博識ある人がその時、本当の古典学者に触れて気付く様に類似の単語によって必要とされたり、先行したり次に続く多数の単語によって、徐々にその意味を多くの意味の中に求める者になるのです。正しい単語を定義するのは誰でしょうか。人間は理性 (raison) を授けられているのです。最も力強い理性、進歩のための理性、償いを要求する (demander raison)、説明する (rendre raison)、飲んでも飲まれるな (en buvant fais-moi raison)、出納簿 (livre de raison)、商号 (raison sociale) と人は言います。しかし、

比率 (ratio) が発見されれば、何という豊かな情報でしょう。そこから配給量 (ration) に至ります。算定された (ratus) は、確信したことを意味します。考える (reor) のは信じることを意味します。そして、裁可 (ratification) は実際に殆どそれら全ての関係を一つに纏めます。この豊かさが人間性であり、私はそれに従わなければなりません。私が分厚い財産目録を作成した時は、既に大変な裕福者なのです。コントの後で、心 (cœur) という単語からは、二重の意味を常に引合いに出さなければなりません。愛 (amour) と勇気 (courage) を意味する必要があります。答える (Répondre) は、責任がある (Responsable) を説明します。誓約する (Spondere) は両方とも説明します。慎重 (Prudence) は、貞淑ぶった (Prude) と調停委員 (Prudhomme) が両親です。勇気 (courage) と怒り (courroux) も同じです。コレラ (choléra) は怒り (colère) に似ています。優雅 (Grâce)、判決 (Jugement)、権利 (Droit)、正義 (Juste) は、一つ一つが最良の意味を持っています。古典学 (Humanités)、国民 (Peuple)、所有権 (Propriété) が言われます。これらの考察の一つ一つが直ぐに重要な観念を発見します。そして、これらの曖昧な素晴らしいしるしに倣って、千年も昔の作家の思想を見抜かなければならないかどうかということでしょうか。更にもっと正確に言うと、その思想は反論の余地が無く、直接的に感じられて、それと同時に何世紀もの感嘆によって認められている美によって先ず明らかになっているかどうかなのです。ここにはあらゆる思想が準備されていますが、単に〈政治的〉で〈道徳的〉なものばかりでなく、同様に〈物理的〉なものでもあるのです。(完)

九 正しい精神

人は正しい精神と言いますが、正しくない精神とは言いません。しかしながら、この意味は他のものによって推測されます。事物の認識には、より一層の困難があるということではありません。そしてソクラテスは、より一層の急を要するということではないと敢えて言いました。二十年前からの数々の世代の人々が厳密に実証的精神に適応されて、私たちが事物の主人にするこの種の認識を容易に支配していることを、私は今日認めることが出来ます。この成長が正しい精神を十分に生むと信じるのは間違いに違いありません。精神は事物を知ると、事物に対して常に正しいのです。そして仕事が義務を負わせると、事物を常に知るとつけ加えて言いましょう。しかしこの認識は、〈正しい精神〉というこの美しい言葉の意味を全然言い尽くしていません。他の原理に基づいて人間性を判断しなければなりません。〈必然性〉の観念で人々を見るのでは不十分であり、正確ではありません。彼らは、その様に見るのに取り憑かれていると自分で感じるや否や、身を落とすからです。商人たちが可能な限りで暴利を貪るという観念は、実際に商人全体を泥棒にします。しかし泥棒には決して満足しません。商人は詩人であり、道徳家です。

マルクス・アウレリウスの中で「汚れから免れた内面の天才を守ること」が読まれる時、それは平凡とは無縁の様に思われます。しかし、結局のところそれは人間でしたし、一人の人間でしかなかったのです。平凡とそんなにも無縁ではありません。多くの王たちは、そんなことを考えることもなく譲位します。しかし譲位が意味されるものは誰もそれに満足せず、あるいは殆どの人が満足せず、そこから戦争になります。動物の様に、恐怖を受けて従うための観念には耐えられません。恐ろしい居直りなのです。〈人間嫌いの人々〉と〈幾何学者〉が、そこからは何も明らかにしないのは本当です。一人は、動物の残酷さは精神の眠りでしかないと言いますが、これも半分真実でさえあります。もう一人は、戦争は必然であり、実際には避け難く、そして如何なる意志であっても何も出来ないと言います。これは深刻な正しくない判断力で、〈間違った精神〉を生みます。戦争は寧ろ恐怖の叫びです。その多くは自由の不意の目覚めに支配されているものです。この不意の目覚めは少なくとも目標を追い越します。平和を保証するためには、人間の英雄主義（ヒロイズム）を堅く信じなければならぬ以外にはないでしょう。しかし、今は技術的な探求を行う時です。この時、人間は判断することよりも最良に試行する方が好きです。というのも試行の始めは、決して怖がらせないからです。ところが、もしも自己に誓えば別のものになるのです。間違った精神はそれ故にここでは、至る所で勇気の無い精神と同じなのです。

〈対象〉は私たちに〈必然性〉を教えるのを引受けます。恐れないう様にしましょう。しかし、信仰と希望と慈悲を如何に教えるのでしょうか。人間の最良の理想型への感嘆と模倣によって教えるのでないとするば、どの様に教えるのでしょうか。子供はそこを無知の力で直進します。そこには人間が自らに与えられる典型があります。そしてこの仲間、沢山の単語の意味によって安心させられます。従って正しく裁くためには、魂の偉大さと尊大ささえもなければならぬと私は言います。厳格さも必要です。多くの人を軽蔑する者は、多くの人を許す者でもあることに

私は気付きました。しかし逆に、多くの人を評価する者は、多くの人に要求する者でもあります。しかしながら、重大な誤りに代わり些細なことを無視すること、秘められた美德や説明のつく誤りを常に探すことは、何の心遣いもなく寛大になるための一つの方法です。私はここでは剥き出しの判決のことしか話しません。私は、別の秩序のことである罰には触れません。無知な儘でいる人や、本性から必然的に嘘つきで乱暴な人を非難する、ある意味では厳しい人間を私は要求することができます。しかし多くの方は別の意味で厳しい人を要求するでしょう。その方は常に魂の絶頂を叩く人であり、そしてそれを待つ人です。（完）

十 繊細な精神

幾何学者たちは、先ず外部の秩序に最も単純で抽象的な関係を考察しながら、科学から科学へ達し、〈生物学〉まで達しました。それは常に既知から未知へ行く力強い方法に支えられていました。この種の力は大変に高く評価されなければなりません。それは単に事物に通じる手がかりによるのではなく、取分け私たちの精神に課す規律によるのです。それは自然に動揺し、不安になり、そして夢想に委ねるものです。デカルトはこの闘いの英雄です。そこでは自由も無く思考されたものは偽りであるという、倫理的秩序の原則に従って時宜を得て待つこと、懐疑すること、徹底的に敢行することを覚えなければなりません。それ故、デカルトは『情念論』において、人間秩序の近くにまで物理学を近付けました。それは禁欲者の研究で、一つの秩序に従って自分しか当てにしてはいけないのです。

しかし人間秩序は待っていてくれません。私たちはそこに沈められます。教育し、説得し、忠告する、あらゆる種類の支配者たちの盲目的な経験主義は、殆ど全てがそこで生まれます。そして、この熟練さが文化というものから分離される時には、恐らく最悪の成長を精神に与えるものとなります。それは模索的な政治が何時も実際には結果しか見ない子供のものであるために、子供染みていると呼ばれるに違いないのです。下位が上位を支えているので、人々は簡単に利益や阿諛や脅威や約束によって導かれます。それ故にお分かりの様に、銀行事業においては明らかに平凡な人々が王の力に到達しています。そして、そこには既に一種の技術がありますが、私たちの意見に大変良く応えるこの柔軟な人間の秩序によって十分に立ち直ったものではないのです。その人は、その様に仮定されていても貪欲で、軽々しく信じて、悪戯っぽいのです。そして財政や政治の駆引き上手な人々は、一人だけの視線で対象が変わる間違った経験にも彼らの賢明な規則を手に入れます。この種の人間は沢山あります。そして、大変に〈繊細さ〉がありますが、精神が無いのです。

この卑俗さは、実際に教養も無い彼らが人々を扱う様に導かれると、無知な人にも幾何学者にも、共通しているものになります。この関係から見て技術者は、銀行家よりも殆ど役に立ちません。それは全て十分に分かりやすく、結果も十分に眼に見えています。しかし何時も理解する術を知らないのが、〈人間の秩序〉の光景によってきちんとした方法での判断力をここで準備する文学教育です。それは最も卓越した〈人間の作品〉の中でしか申し分なく示されないものです。〈繊細さ〉は上品です。そして、本当の術策は最良のものを存在させるために、最良のものを仮定することにあります。もしも意見が如何にして意見に答えて、子供が実際に怠惰か嘘つきであるために、怠惰か嘘つきであると思わせることで十分であると良く理解したなら、この状況は奇妙なものと思えないでしょう。人間に働きかけることとは、その人にその人自身を思い起こさせることです。従って、あなたは寧ろ上位の段階に目覚める番です。何故なら全ての人々が眠っているからです。

次に来るのはそれ故に判断力の最高法規です。人間の秩序が対象として理解されるや否や、そ

れは暴君のものが全てを明らかにするという事です。人間の威信を奪って下さい。最も低い処へ再び落ちます。先ずはあなた自身です。あなたは自分を動物だと思って下さい。そうすれば決然とその様になりますし、そうすればおずおずとその様にもなります。あなたはその様になります。直ぐになります。しかし、他の者たちとしても同様です。ここで分かり易く言えば、何故経験が立ち直らないと必然的に私たちを騙すのかが明らかになります。それ故に私たちに教えて、規範に従って管理し、忠告し、教えなければならないのは〈最良の人〉なのです。直接的な経験の中には珍しい人々や混乱した人々がいます。もっと正確に言いたいならば、審美的という文学的経験の中には、その反対に選択された人々や純化された人々がいます。何故なら表現による美は、ソクラテスやマルクス・アウレリウスやウェルギリウスの様な人によって構成された、感情や勇敢な思想を変化させる要望と方法を私たちから取り除くものであるからです。というのも決して美しくないものは、分割してそれらの水準で再構成する平凡なものへ委ねられるからです。しかし、美しいものは常に元の儘の同じものに戻ります。もしも〈人間の本質〉を思考したいと思うならば、この救済が無いと何時も侮辱されるのを認めるのはその対象です。偉大な作家たちはそれ故に、人間が自ら人間を見ることが出来る唯一の鏡でもあります。そして、感嘆は〈精神〉の形成のための厳正な方法です。（完）

十一 間違った観念

〈福音〉よりも〈社会主義〉の中に多くの真実がある、と私は良く認めたいと思います。しかし〈社会主義〉とは、〈福音〉に無いものであるに違いないとは誰も信じないでしょう。その点について社会主義者は進歩が行われている、と自然と考える様になります、やり直すことは時間の無駄であるとする様にもなります。〈福音〉の中に人間性があつたことは〈社会主義〉の中では消えていました。でも、古い書物の中の最良のものは、新しい書物の中の最良のものの中でも十分に説明しています。そして結局のところ、成熟に達した人間の精神は少しも子供っぽく振舞う必要は無いのです。それは恰も、人間が先ず子供でいる必要は少しも無い、と言う様なものです。少年時代ではないこの精神は、技術的活動が発展し得るこの種の知性に応えます。そして私は、最後の観念しか必要としない技術者が、思考のこの節約によって最早全ての観念を所有するに至らないことに注目しました。これは私が容易に理解しなかつたことです。そして私はそのことを簡単に僅かな言葉では説明しません。しかしながら、私は何かを言いたいのです。何故なら、私たちが持つ余すこれらの技術の学校は、間違つて構成される或る種の人々を私たちに準備しているからです。それは定式と熱狂です。もしも、その様な定式が現代の日付で最も新しいものでしかないなら、私はこれらの熱狂から何も確かなものが無いことを知りました。実際に、間違つた観念は何ものでもなく、そして同様に本当の観念も何ものでもありません。全ての観念は本当のものであり、又間違つたものものでもあります。しかし、それを捕まえるや否や、全てが間違いになります。全てのもの、真実を生むのは、それらの観念を通り抜ける動きです。単に最良の対象に接近したり多くの手掛かりを与えるものの背後からだけでなく、最初のものや古いものからも、それによって少年時代は成熟とその門を許します。何故なら有名な定式に従って下位は上位を支えるからです。単に昔だけでなく、今も常に支えます。そして私たちの裡で生きているのがまさしく私たちの少年時代です。それは悲しみと病気を拒絶します。見出されるものの向こうを探します。そして、それは常に行動全体や思想全体に必要としない動きをもう少し注いで、結局は仕事をしながら歌い出すこの豊かな世界を楽しみます。少年時代を完全に抜け出た者は、まさに素っ気ないです。そして吝嗇の老人です。散歩をしているのは死者たちです。それに死者たちが多少なりとも知っていることなどは、殆どどうでも良いのです。老いた〈社会主義者〉とか〈民主主義者〉は、常にメドウサ(1)の頭と同じで、〈希望〉を凍らせます。彼らは全てを終わりにして、片をつけに私の処にやって来ますが、私は歩いて行き、そして持っている観念によって他の観念を身につけたいのです。かくして年齢を克服しなければなりません。私は老人たちを恐れます。マルス(2)は歳取つた人間です。

学ぶこととは、最初の詩からより一層厳格な概念へ行く道を良く作り変えることです。勿論、間違つて理解してはなりません。どんな人のどんな思想も、これと同じ動きです。あるいは思想は何ものでもありません。平和を愛し、平和に全能の力を望む者は、『イリアス』を燃やすのを望むことと無縁ではありません。熱狂と野蛮でしかないと言うでしょう。しかし、これは生きる

ことなく思考したいことなのです。何故なら現在では『イリアス』全体が、私の夢と怒りと短気の中で戦っているからです。私の足と手は、アイアス(3)の如く動き回って私を導きます。私の思考よりも速いです。しかし、この『イリアス』は間違っただけで構成されています。これは言語に絶する混乱でしかありません。この未開人は決して話す術を知りません。私も彼に話す術を知りません。その代わりに真の『イリアス』は、既に人間の形を所有しています。自分の輪郭の中で思考されます。その表現によって高められて、既に観念になっています。それ故に私は自分をそこに発見します。感情はその観念の中をそこに通過します。そしてどんな人も導きます。最も子供っぽい人は、そこで形を整えて別のものを呼びます。『イリアス』は『オデュッセイア』を呼びます。両者とも『アエネイス』を呼びます。そこにユゴーはキリスト教徒の冠を見ようとした。そしてダンテの「地獄篇」の如く、タッソーの中の騎士道や教皇権や十字軍は、他のものを呼びます。何故なら一つの観念が形づくられると、忽ちそこから出なければならないからです。あるいは寧ろその観念と共に、そこで他のものを作らなければなりません。そして観念は最も満足しないものであるとさえ私は言います。何故なら観念は最も感動的でもありますし、他の観念にも又最良のものを要求し、その様にして私たちに最良のものを真の思想に立ち帰らせるからです。ホメロスだけで満足出来ないからです。そして、自分の完全な形の中に全てを閉じ込めますけれども、それは開始に過ぎないからです。そのためにはまさに朝の祈りの様に、読むことや読み返すことは良いことです。(完)

(1) メドゥサは、ギリシア神話で、醜怪な顔をしていて、頭髪は蛇で、その眼は人を石に化した。

(2) マルスは、ローマ神話で戦いの神であり、ギリシア神話のアレスと同じである。植物や春や青春の神でもある。

(3) アイアスは、トロイア戦争時のギリシアの二人の英雄である。

十二 ストア学派たち

〈ストア学派たち〉は、普通の言葉に一つの形容詞を与えた栄光を、プラトンと共に共有する彼らの道徳によってしか知られていません。しかし彼らの力強い格言は、それに相応しい考察による観念を抛り所としていました。私には〈思想〉の論理そのものにおいて、一度も相応しくなかった限りは遠い様に思われます。そして、譬え博識な人々がその点に関して何を言おうとも、ストア学派たちの教義の部分は論理的であるのが要求されていまして、やはり他の教義と同様に正確に語られています。それは単に理解するのが少しばかり難しいだけです。実際に〈ストア学派たち〉は、それらの〈観念〉を最後に判断するために〈ギリシア〉の推敲を十分にやり終えて、その上でプラトンはより卓越したものを既に何か確立したがっていました。しかしながら彼は当然に〈観念〉の哲学と見做されています。というのも彼の作品は、如何にしてヘラクレイトス(1)の捉え難い外観が、その数と直線と円の最も明らかな証拠となる堅い主張によって整理されているのかを示すものであるからです。有名は洞窟の寓意とその系列のものは、幾何学の対象における観念と図表を識別して、今日でも未だ私たちのあらゆる科学を説明しています。

これに対してアリストテレスは二〇年間研究した後に、実力で自らを高めました。そして、思想のこの二番目の歩みもやはり美しいものです。何故なら、確かに〈観念〉は存在していないからです。存在しているのは次の様なもので、如何なる観念も等しくない特殊な事物の様なものなのです。そして全てを支えているのは個別的なものなのです。というのも、それは〈音楽家〉である〈ギリシア人〉ではなく、それは〈音楽家〉であると同時に〈イギリス人〉であるソクラテスそのものであるからです。そして諸観念が、外部の秩序も無く、お互いに接触する力さえも無い時、全ての事物のモデルとして永遠に保っていると信じるのは既に少なくとも許されていません。ベッドのモデルに倣ってベッドを作るのは職人ですが、本性はその中で働きます。どんな本性の中にもその固有なモデルがそこに閉じ込められていて、独特になります。それは厳しい哲学者が二つの言葉で説明する〈肝要な形〉です。事物の抽象に接近するのを目指して、〈観念〉の代わりに一方では〈形〉を言っています。更に次には、事物の本当の観念が事物そのものであり、心の奥底から事物そのものであることを理解させたがっています。それは最も素晴らしい形而上学に投げ込んだのであり、ライプニッツの形を身につけることになるでしょう。取分け抽象の可能性は、〈権威〉の水準へ高められます。そして、その様にして個人というものが自分自身の中で完成したのであって、発展させる中でしか変えることが出来ませんでした。そこからどんな〈行為〉の中にも〈神〉がいて、生きています。神学者たちの永遠のテーマです。勿論、この哲学は素朴以上ですけれども、既に地上から余りに遠いものでした。ストア学派たちは真っ直ぐにその問題へ進んで行きました。

もしも個人だけが独り存在したなら、如何なる一般的観念も真実ではなくなりまして、思想があるが儘の知覚の中で失われなくてはならない、とそこから引き出す必要はありません。本当の観念は、本当の知覚にならなくてはなりません。しかし、その様な知覚の状況には裏表があり

ます。というのも一方では精神がそれらの形に従って素描しなければならず、あらゆる意味でプラトン哲学は真実なのです。従ってストア学派たちは、ご存知のとおり〈共通理性〉のために自説を曲げませんでした。しかしもう一方では、知的な知覚は同時に敏感でなくてはなりません。つまり様々な相違の中で順番に個々のものを把握しなければなりません。それが見せてくれることは、観念は方法でしかなく全てのものとそれらの一つ一つのものとの間には際限無く多様性があるのは明らかであるので、真実は絶えず発見するものであるということです。それ故に、そこにはそれらの観念を常に適用し、対象に従うと同時に方法に従って複雑にしながら、労作と行為のための〈思想〉があるのです。知覚可能な (saisissable) と驚くべき (saisissant) は、一つの言葉で言っていた様に、その様な知覚は行為のための知覚です。それなのに英知は、労作のためのものであり、観念の把握においては少しも無いのです。それ故に如何なる観念も真実でないことを仄めかしながら、賢者は決して間違えないこともストア学派たちは言っていました。何故なら、精神の活動は真実に従うからです。クレアンテス (2) はストア学派の人々の中にいる時に、学ぶや否や賢者になります。何故なら彼は観念によって事物の方へ赴くからです。真実であるのはこの進歩です。人々も又、真実の〈精神〉は目的に向かって集中し緊張した〈精神〉であると言いました。そして、その様に良く思考するのは考え出すことであり、貫うことではなのです。その点でプラトンは全ての自分を認めています。何故なら賢者が結局のところ〈影〉を説明しなければならないなら、プラトンは〈洞窟〉の中で全てを言ったからです。しかし、プラトンの才能が恐らく余りに見抜く儘にして置いたのです。政治の悪魔が瞑想しないで立て直すために彼を支えていたことは別にしても、プラトンは成功します。そして恐らくアリストテレス学派の人の才能は大地により良く植えられて、論理が乗り越えられて、ストア学派の人々が全ての間違ひは等しいと最後に言うことが出来なければなりませんでした。これはキケロが、怠惰で臆病な娘たちの様に全ての誤りも同様に等しいことを、決して疑わずには理解することが出来なかったことなのです。(完)

(1) ヘラクレイトス (前五五〇頃～前四八〇頃) は、古代ギリシアの哲学者で、「万物流転」の説を唱えた。

(2) クレアンテス (前三三一～前二三二) は、ストア学派のギリシアの哲学者。『ゼウスへの讃歌』のストア主義は宗教的に彩られていた。

十三 想像力の規律

心配する人が見せる如く、思考し始めると身体は顰めっ面をします。顰めっ面をしても勘定書は変わりませんし、幾何学研究も変わりません。そして行為が規制されることなく、その様に形づくられる認識は大変良く抽象するとか分離すると呼ばれます。そして、博識な堅固な人々を犠牲にして屢々笑いを生む気晴らしは、彼らの本能が本性と大変にかけ離れているしるしでもあります。ダンスは、その動作がその時精神全体を占めますので、その逆にあります。両者の間には、〈平和〉や〈正義〉や〈運命〉の如く、最も困難な問題に常に自然と係わる熟考の働きがあります。従って不幸な人々しか殆ど熟考に時間を費やさないのが分かります。自分自身のために話して盛んに身振りをする人に、パリで出会わない日は少しもありません。そしてその場合に言葉と動作が先行して行き、観念は決して止まることなく、そして用心によって身につけることなくついて行きます。教養の無いこの人の激怒を節度が無いと呼ばなければなりません。その最も慎重な人々は、トランプ遊びとか挨拶のやり取りによってそこから身を守ります。もしも想像力がそれと同時に規制されていなければ、感動的な観念も決してついて行けないのが証拠です。それ故に幼年時に与えられる装飾を無くしていなくても、多くの確かな観念を待っていてはなりません。それらの確実な観念は、最も有利な場合には先見の明のあるしるしを生みますが、本性が粗雑ですと手入れが行き届かないで屢々悪人とか不幸を生みます。彼らがもっと自分自身の近くで思考して、想像力が最初の観念の中で既に獲得されていて欲しいと私は思います。話なら何でもそれにかなり成功しますし、観念はその中に屢々秘められています。それは決して悪ではなく、善なのです。もしも空想力がその様に結合されて、思想が注意深い身体全体を支える観念と共に組合わされる如くなるなら、これは熟考にとっては有利な状況です。これは幼いしるしに、大人の人物像を与えることでしよう。

コントは、これらの困難な問題の中で案内人と見做さなければならぬ重大な結論への法則を発見しました。それはどんな観念も、単なる〈想像力〉の遊びである物神崇拜（フェティシズム）によって始まるというもので、〈神学〉によって、あるいはもっと明瞭な言葉を望むなら〈神話〉によって改良されるものです。そして最後には〈実証的な〉状況に導く方法の経験によって完成します。それは私たちが最初の子供であるということに戻ります。どんな思想も、どんな老人も、最初の子供であると私は更に言います。それはその始めが決して真の成熟へ到達しない始まりではないのです。それ故に、詩だけが実際に観念を与えていると言う処まで行かなければなりません。それによってしか古典は理解され得ないと教育が言います。子供は沢山の美しいテキストを読み、学び、暗誦し、写し、翻訳します。それらの中で観念の表現が想像力の自由な遊びによって常に明らかにされます。そのことが最初に気に入っているしるしによって見分けられることを理解して下さい。これらのテキストは自然と曖昧になり、子供以上になります。しかし、その様な状況が私たちの本質には適しているのです。そして、それが厳密に表現の中で始められた観念に委ねることで手に入れなければならない用心の様なものです。子供は何時も観念を形

にする処へ到達しません。しかし、もしも形にするなら、子供の観念になって根を張らせたものになるでしょう。僅かでも才能がなければ、つまり理解力に先行する洗練されて規制された想像力がなければ、誰も実際の観念を持てません。

何時も正しい文体で隠喩として再発見する神話や寓話の力強さは、別な風に説明され得ません。プラトンは神話によって語り、そしてイエスは寓話によって語ります。それによって人間は自らの核心に触れて、最初に目覚めるのは吟味する身体です。想像力は詩的な魅惑によって申し分なく使われます。しかし、英知がもっと奥深い巨匠は、沢山の意味がこれらのイメージで一杯にして、そこに私たちを残します。そして可能であるなら、そのイメージから観念を引き出すのは私たちなのです。その様な観念にはその時、幼年時代があり、成長があり、そして真の成熟があります。私は、思考することを学ぶために、その他に何らかの方法があるとは決して考えません。これは正しいことですが、詩や物語や寓話がそんなにも早く説明しないので、余りに秘められています。あなたが精神の中へ投げ入れるのは種子の様なものです。もしも人が何らかの解釈に導かれる儘でいるなら、最良の働きは常に繰り返して言う暗誦によって文学的表現に立ち戻ることになるでしょう。聖書は、その様にして数え切れない世代の人々へ、〈精神〉の前に〈文字〉を与えます。崇拜に帰すべきこの方法は、余りに平凡な観念に力を与えます。ホメロスは、その感嘆によってギリシア人たちの聖書になりました。（完）

十四 歴史的的精神

古典研究は恐らく歴史そのものを行うことよりも、もっと良く歴史的 정신を明らかにします。ここでの最良の案内は、至る所で最も古く、そして至る所で存続している死者たちへの崇拜です。ところで生き残った人々の精神においては、愛という本来は人間的な部分である感嘆する欲求によって、常に純化と礼讃の試みの様なことが行われています。一人の生者に関しても気高い愛は、些細な物事や屢々重大な間違いを無視したり消去したりしますが、それは常に最良のものを信じたり願ったりするための理性を探しているからです。どんな人にとっても恐ろしい苦難とは、その様に何時も美德に借金があり、そして屢々破産から破産へ進むことです。しかし死者たちは最早如何なる間違いも行いません。そして、死者たちの思い出に相談することが熟考にとっての正しい動きであるので、私たちの思想の中で死者たちは、私たちよりも真剣で理性的なものを見出すことに結び付いています。それ故に崇拜は記憶を追いかけます。それによって確かに気高さへの予断が、自然よりももっと大きな規範を何時も与えているので、個人を救済しています。

歴史的 정신のこの規範に倣って、一種の真の伝説を幼年時代に与える様に、それ故に多くのものを大胆に削除したり忘れたりしなければならないでしょう。残っているもののうちで最良のものだけしか考察しない時に、純文学に達するのです。そして人間性は、このやり方によるしか自らを救済出来ません。それ故に博識とは全てを減少するものであり、悲しい働きです。いずれにせよ、教育には懷疑は少しもありません。英雄の歴史でなければならず、ヘラクレスの神話はその完全な規範です。

私は真の伝説と言いました。何故なら人間が、恐るべき動物や人間の中にある、単なる狂暴で貪欲なものであったあらゆるものに打ち勝ったのは本当であるからです。それは人間が火、車輪、巻揚機、テラコッタ、ガラス、棍棒、そして弓や沢山の道具や機械を発明したことは本当であるのと同じです。同様に、言葉と文字と代数、市場と銀行と協同組合、正義と勇気と節制、そして現在存在している様には未だ存在していなかった全てのものを発明したことも本当です。そして全ての始まりについては不確実さがありますが、方法についての不決断は決して沢山ありません。野生のどんな植物が小麦になるのか人は知りませんが、小麦が現在存在しているものの様になるには、耕作と伝統と数々の穀物の中からの選択によることは知っています。動物の調教や、社会の状態と知識の伝承、それと同時に個人の忍耐強い試みと創意工夫に富んだ考察を常に前提としているあらゆる発明にとっても、それと同じことです。そして教育における最大の間違いは、全てを支える底辺のものを忘れることです。例えば読書は耕作を支えるものですから、従って最少にしか知られていないものを歴史の中から忘れることは、謂わば大地から去る様なものです。しかし、それは先ず能力と貯えと暇な時間を与えることが発明を確保するためには、最も容易に前提とされ得るものです。それがなければ、高邁な人生は少しも想像出来ないものになるでしょう。この前提とされた歴史の中を除いても、どんな人も自ら再発見し認めますが、それは

自然よりも実際に偉大です。何故なら実際の人生は決して沢山の連続を提供しませんし、人間の状況は真の力を容易に忘れるものであるからです。この理由から、より最近の事件により最も良く知られている歴史が、殆ど何時も小事件の下に進歩を包み隠すことは疑いの無いことです。それ故に、最初の発明を仮定されている歴史は、他の歴史への良い準備になっています。私は、体刑や戦闘や改革の歴史の中に、小麦の歴史とか火の歴史を求めるのと同じ種類の真理を人が探していたことを望みたいのです。（完）

十五 詩人たち

言語は思考するための道具です。私たちが怠惰で無気力で動きが無いと呼ぶ精神の人々は、取分け恐らく無教養の人々です。その意味で彼らには僅かな数の言葉や表現しかありません。そして一言で全てを行う用法は、大変に印象深い卑俗さの特色です。この貧しさは、お喋りや喧嘩に見る様に既に十分豊富にあります。しかしながら、小売店のせつかちさや同じ言葉の反復は、このメカニズムが少しも支配されていないことを良く示しています。「訳の分からないことを言う」表現は、その時全ての意識を取り戻します。このお喋りが観察されるのは、あらゆる種類の陶酔と妄想の中です。そして私は、他の原因によってその人が戯言を言うに至るとは更に決して信じません。お喋りの中の激怒は、ありふれた決まり文句と一緒にになった狂気から生まれます。従って思想の最初の閃きは、どんな大人も子供も自分が言っていることに一つの意味を見出すことであるのは本当です。大変に奇妙なことに、私たちはこれから言うことを知ることも無く話すことの必要性に支配されます。そしてこの謎の様な状態は、誰の裡にも発端があります。子供は思考する前に自然と話し始めますし、自分自身で理解する前に、他の人々から良く理解させられます。それ故に思考することとは自分に話をする事なのです。

確かにコントが、自分自身と共に独りである人間は弁護士であると同時に裁判官であることに気付いた様に、それは美しい瞬間です。それは熟考の瞬間でもあります。それはまさに自覚の瞬間です。恐らく人は〈自己〉に話をする時しか〈自己〉を見せません。しかし言ってみれば、この孤独なお喋りには偏狂へ行く心配もあるという訳です。何よりも人は自分の言葉を導くことが出来ません。何故なら自分の言葉を導くことは、ごく小さな声で試みたり大きな声で繰り返すことでしかないからです。私から私へ、私は私の言葉を信用しなければならず、それを聞かなければなりません。そして失墜は普通の状態であり、直ぐに苛立ちます。ここで人は最高の価値のものを把握しますし、それによるメカニズムが英知の性質を帯びます。そして確かに繰り返すことには際限無く喜びがあります。それは自己を管理するのを認めることであり理解することです。それ故に物語は固定された形式の中でしか好まれません。

しかし、見分けることのこの必要性に対してのメカニズムとしての言語においては、生物学的なものへの変化の要求があります。音楽や詩や雄弁はそれに満足を与えるに違いありません。何故なら、幾つかの部分は休息しなければなりませんし、その他の部分は何もしない後で緊張が緩和しなければならぬからです。そして美しい言葉で飾られた記憶がなければ、教養の無いお喋りが話から話へ投げ込まれて、思考の閃きの如く途中で与えるものを正確に繰り返して言うことさえも出来ません。

この知的貧困とは反対に、美しい詩句が熟考にとって素晴らしい支えになることを考察してみましょう。何故なら一方で、間違いなくそのリズムとか韻とは別な風に言うことが出来ないので、人は立ち止まり、再び発見し、自己を取り戻します。しかし、取分け自分自身の思想を歌うためのこの芸術は、音のためにしろ、調音のためにしろ、リズムのある文章の中で、常に努力の後

の代償を進展させます。それは話をする器官の安定した働きの後で、休息に立ち戻るものです。人はその様にして間違っ創られた文章が他の文章を呼ぶことなく、さ迷っている話から守られています。それ故に自己との対話は、詩の毅然とした格言によってしか申し分なく維持されません。それ故に子供が思考し始めるのは、その様な働きによるものです。その時は子供が自分自身の声を聞くことが出来ますし、人間的な作品の中に自分自身の思想を認めます。しかし、最初の成果は審美的なものです。子供は先ず最初に、我慢するか掴みます。その次に自分を認めます。そして作品の選択に関して、これらの考察が直ぐに先生を安心させます。何故なら作品には美しさがあり、正しい認識力に溢れている事の本質があるからです。しかし子供は、我慢する前にそれらを理解するという順番では決してありません。確かに子供はそこで、子供の即興で理解しなければならないのかも知れません。しかし先生は、子供が興味を引くものも同様に子供を教育することを大変容易に信じています。その反対に子供は、先生が言うことに迷います。人が自由な解答に思い切って挑む時、自分自身に解答をもう一度質問するために、それらの解答を何時も直ぐに書かせるのに思い切って挑む時は、決定的に理性のものなのです。覚えられていて記憶になっている決まり文句を自然に〈思想〉と呼んでいます。普通の言葉はその様にして一つの対象に熟考を与えているのです。そして、その様な支えが子供に必要であると私が言う時、最も堅固で成熟した精神は無しで済ますことが出来ると私は理解しません。最も平凡なものの欠如が漂流することとなり、落下というメカニズム的な法則によって一つの観念を、別の観念へ落とすこととなります。

オーギュスト・コントが〈祈り〉を、詩についての瞑想と呼びたがった時、彼はそれ故に重大なことであると言いました。というのも彼がより一層卓越したものを持つには〈人間性〉を調べることであるからです。それはモーゼの如く岩を叩くことであり、〈奇跡〉を呼ぶことです。多分、千年も遡る詩に自己を再発見することです。そして最も奥深い豊かさを、際限無く不動のこの対象から引き出すことです。どんな審美的瞑想にも、この特性が良くあります。しかし〈祈り〉という美しい名は、全ての人々に等しく似合うものではありません。私が何処であろうと敬虔な暗誦によってこの親切な対象を生むことが出来る時に、それは最良に似合うものを認めます。そして少しも教養が無く、祈ることも無い者は、常に真の注意力を知らないのです。（了）

この翻訳は、フランスの哲学者アラン（一八六八～一九五一）が一九四六年にメリディエンヌ社から刊行した『人間さまざま』Alain, HUMANITÉS の中に所収されたもので、一九二五年に雑誌「銀の船」に掲載されたものの全訳である。テキストとしては、Alain, Les Passions et la Sagesse (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1960 に所収されているものを使用している。このテキストの前文では次の様な説明が書かれている。

「『わが思索のあと』の中でアランは、『思想と年齢』の作品の一部として続く頁のことを語っていた。モール・ランブラン夫人への献辞にも、その前の方で読めるものが伝えられている。

これらの作品は当初、雑誌の中で発表された。「銀の船」である（一九二五年十二月一日号で、同様に j・シュリュベルジェSchlumbergerの記事がある。『大戦の思い出』の献辞の中でアランが語っているのは「野営地にて」のことである）。「銀の船」はアドリエンヌ・モニエの雑誌で、編集はジャン・プレヴォであった。

これらの作品は一九四六年に、『人間さまざま』の中で再出版された（メリディエンヌ社・血縁叢書、アンドレ・ダズ監修）。」

従って、アランのこのテキストは『思想と年齢』の続編として書かれた様であるから、タイトルは『思想と年齢』としても良いと思うが、テキストとして使用したプレイヤード版に従って『人間さまざま』とした。

アランの思想の特色の一つとして挙げられることに、生涯に亘ってその思想内容が殆ど普遍であり豹変することがなく、阿ねることもなかった点がある。従って成熟した精神の人は敢えて稚拙に振舞う必要が無いことを言っている。「成熟に達した人間の精神は少しも子供っぽく振舞う必要は無いのです。それは恰も、人間が先ず子供でいる必要は少しも無い、と言う様なものです。」（「間違った精神」）

それでは何故〈子供っぽく振舞う必要は無い〉ことになるのだろうか。それは人気を得たいとか有名になりたいとか、余りに他者への意識が強く働くことになるからではないだろうか。地位や名誉を得て有名になることはそんなにも重要であろうか。アランの場合は、他者への意識よりも自らの思想そのものの深化に努める精神を所有した正真正銘の哲学者であった。従ってアランはソルボンヌ大学教授の誘いを承諾せず、定年退職するまでリセ（高校）の一教師の儘であった。これは当時のソルボンヌ大学に入れば自らの思想を自由に表現出来ないことを憂慮したためでもあった。又、あらゆる文学賞なども固辞していた。これも授賞式などへ出席しなければならず自らの思想を表現する時間が惜しかったからであった。因みに、リセの教え子であったアンドレ・モーロアから懇願されて文学国民大賞を受けたのは死の三週間前であった。それも病で寝たきりだったので、自室のベッドでの受賞であった。

勿論、色々と入会のための運動を必要としたアカデミー・フランセーズ会員の名誉も眼中にはなかった。そういう意味からもアカデミー・フランセーズ会員の名誉のために奔走したあらゆる

哲学者や文学者たちと大きな相違がある様に思える。只管、死ぬまで執筆活動に邁進したその姿は、〈子供っぽく振舞う必要は無い〉こととしたアランの真摯な生き方そのものだった様に思えて来る。そこにはアランが四十六歳の時に、高齢にも拘わらず第一次世界大戦に志願兵として参戦した経験が影響していると思うが、この点についてはここでは紙面がないので割愛させて戴く。なお、この翻訳は本邦初訳と思う。

最後に、体系化を企図しなかったアランの思想は現象学の初めとしても位置されているので、ここに付け加えて置くことにしたい。

二〇一七年五月五日

東京西郊「たまプラーザ」の寓居にて 高村 昌憲

アラン
人間さまざま

2017年5月6日登録

<http://p.booklog.jp/book/114389>

著者：アラン（翻訳：高村 昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114389>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト